

ヘルダーリンにおける „still“ の意味

—— 抒情詩を中心として ——

福 嶋 正 純

現象の中から精神を汲みとり、移ろいゆくものの中に永遠を見るのが詩人の態度であるが、例え身は異郷の旅にあり、安住の地を見出さなくとも、詩人の心は、常に深い沈潜のしじまの中にある。魂の自由と安息は詩人にとって根本となるものであろう。言わば一生を旅に送り、魂の暗闇にいたるまでは、安息の地を見出しえなかったヘルダーリンにあっては、とりわけ静寂と安息は意味あるものと言えよう。彼の心は、生涯を通じて、still なるものを求めている。24 才のヘルダーリンはヘーゲル宛ての手紙の中で、「君には、何らかの騒音が身近にあるのは良い事だろう。僕には静寂が必要だ。」¹⁾ と静寂を求めており、1800 年 12 月の妹宛ての手紙では、「私の心の中にはやすらぎと、静けさを求める強い、差迫った欲望がある。」²⁾ と、やすらぎ、静けさを求めてうったえている。又、1804 年の 3 月には von Seckendorf に、「私は、来るかも知れない無邪気な、静かな日々の事を想っています。」³⁾ と書き送り、stille Tage に想いをはせている。ヘルダーリンの作品の中にも、このような静けさへの想いから、die Stille 或は、形容詞の still は度々使用され、屢々豊かな意味が籠められて作品に深さを盛り込んでいる。still は彼の愛用する表現の一つとなっている。私は以下主として、抒情詩を中心に、この言葉に籠められている深い内容を探ってゆきたい。

すでに少年の頃から静寂はヘルダーリンにとって最も関心のあるものの一つであった。友人イマニュエル・ナストに宛てた手紙の中に、度々その事について触れられている。「私は今一人きりです。いつも、言はば静寂の中に居ます。そしてこの事は私にとって心地よい事です。」(1787 年 4 月)⁴⁾、「私達の周りはずべてが非常に静寂でした。」(1787 年 11 月)⁵⁾ 又妹には「この生活は本当に静かで穏かです。」(1790 年 12 月)⁶⁾ と書き送っている。ヘルダーリンはこの頃、静寂、安息を直接に主題にした作品を三篇ほど書いている。そのうち Die Stille (1788 年) は、最も初期のものであるが、この詩の中で、詩人が歌っている静寂を先ず検討してみたい。

彼は静寂を次の様に歌う。

Die du früh dem Lärm der Thoren mich entrücktest,
Besser mich zu bilden, nahmst in Mutterschoos,
汝、早くから我を愚人の喧騒から遠ざけ、
より良く育てんとし、母の懷に連れ帰りし者

(Die Stille, V. 3f.)

静寂は du Sanfte! Freundin aller Lieben! であり、holde Freudegeberin! であり、hehre Stille⁷⁾ である。そしてこの静寂こそ、彼の憩の場所である。

O! in meines kleinen Stübchens Stille
War mir dann so über alles wohl,
Wie im Tempel, war mirs in der Nächte Hülle,
Wann so einsam von dem Thurm die Gloke scholl.

(Die Stille, V. 33ff.)

その鐘の音は天国を想わせ、彼は Himmelswonne⁸⁾ に没る。静寂の優しい手は、若者が、混乱の世の中で、闘い疲れ、哀愁に満ちた孤独に沈む時、母の優しさでいたわって呉れる。

O wie pflegtest du den armen Jungen,

Teure, so mit Mutterzärtlichkeit,

(V. 45 f.)

おおどんなに汝は貧しき若者を

貴き者よ、母の優しさでいたわった事か

静寂はいたわりであると同時に、苦痛を鎮め、若者に勇気を与え強く育てる。

O wie schweigtest du oft ungestümme Schmerzen,

Stärktest du den schwachen oft mit neuem Muth.

(V. 51 f.)

おお汝は何と屢々激しき苦痛を鎮め

心弱き者を、新たな勇気をもって強めて呉れた事か

静寂の中には天国が住っている。

O! in deinen Schatten, Teure! wohnt der Himmel...

(V. 83)

おお汝の影の中には、貴き者よ、天国が住う。

このような、天国をもたらす静寂や、 *die stille gottergebene Leiden* (V. 75) からは、明らかに、敬虔主義からの影響が汲みとられる。A. Langen は „Der Wortschatz des deutschen Pietismus“ の中で、「沈黙と静寂、人間の受け容れの態度が、神が人間の魂の中に立ち帰って来る為の前提条件であり、人間の魂と神との交り、神と魂の合一の前提であり、最初の要求である。」²⁹⁾ と述べている。母親の厳しい宗教的雰囲気の中で育てられ、神学校に学んでいるこの頃の彼の言葉には、後年の、意味を深く掘りさげた、含蓄のある用法は現われていなくて、still においても、未だ敬虔主義的要素を多分に有している。

— o! Himmelsaugenblick! —

O du Stunde *stiller*, frommer Seeligkeit! —

おお天国の瞬間よ!

おお汝、静けき、敬虔な至福の時よ、

(Die Meinige, V. 114,) 1786 年

;an den Heiligtümern der Freiheit

Wallten wir dann vorbei in frommer seeliger *Stille*,

Faßten sie tief in's Herz,

自由の聖殿のそば近く

我々は敬虔にして、至福にみてるしじまの中を通りすぎ、

その姿を心の中に深く刻めり

(Kanton Schweiz, V. 65ff.) 1792 年

Daß er kalt an meinem Leichensteine

Stehet, und des modernden Gebeine

Keines Junglings *stiller* Seegen grüßt,

若者の我が墓石の側に、冷淡に立ちて

静かな至福に満てる若者の誰一人朽ちゆく骨に

礼をつくさぬを(悲しめ)

(Schwärmelei, V. 31 ff.) 1788 年

そして自分の魂も still である事を願わずにはいられない。

Still, wie das Grab, sei meine Seele!

心よ、墓の様に静かであって呉れ！

(Die Weisheit des Traurers, V. 3) 1789 年

彼は、孤独を求め、ひっそりと歩む。

Wann ich im Thale *still* und verlassen, und

Von dir vergessen wandle,

私が人から離れ、ひっそりとお前からも忘れられ、谷間の中を歩く時、

(An Stella, V. 2) 1786 年

何故ならば、彼はただそこでのみ再び、人間の正しい道を見出し、自己の魂を集中しえたからである。彼は自然の中にやすらぎを見出し、そこでの静寂を愉しむ。

「私達は谷間の中で、安息と静寂を喜ぶ事が出来るのです。」^{注10)} 何故なら自然は、静かに、詩人を母の膝の中に抱いて呉れるからである。

Ewig trägt im Mutterschoose,

Süße Königin der Flur!

Dich und mich die *stille*, große,

Allbelebende Natur;

美しき野の女王よ！

お前と私をとこしえに母の膝に抱くのは

すべての生を支える、

静かな偉大な自然なのだ。

(An eine Rose, V. 1 ff.) 1793 年

彼は自然に憧れる。それは自然が詩人に母の膝の中で、静寂を与え慰めをもたらすと同時に又、強さをも授けて呉れるからである。「偉大なる自然は僕達をどうしても高尚にし、強くしないではない。」^{注11)}

この様な静けさを身の廻りに漂わしている人物を、詩人は、この上なく尊敬し、その清らかさ、静けさに自己が高められるのを感じている。「神様に誓って、私は彼女を永遠に尊敬するでしょう。彼女の本质の中にある、高貴さと静けさは、ここらあたりの人達とは、かなり対照をなしています。」^{注12)}

この様な人物の典型を、彼はディオティーマの中に見出している。「愛らしさと気高さ、淑やかさと才智、精神と情緒と容姿とは、此の人に於いて幸福なる一である。」^{注13)} と彼はディオティーマを讃え、「彼女は天使の様に美しい。優しくて精神的で、崇高な魅力ある顔！彼女の許に居たら4年もの長い間飽かずに眺めて、自分もすべてを忘れることが出来よう。此の絵姿の此の求むる所なき静かな魂は汲めどもつきぬ豊富さがある。」^{注14)} と友人ノイファー宛の手紙の中でのべている。ここでは *still* は、最高の完全美を備えた人物を形容する言葉となっている。静かな魂の持主であること、その属性が静寂であることは、即ち人間本来の理想であり、人間的なことである。「若い時に、上の方へ望むのは悪い事ではない。だが人生が円熟して来れば、再び、人間的なものへ、静かなものへ傾いてゆくものだ。」^{注15)}

この様な形容で讃美されたディオティーマは、もはや人間にして、人間にあらず、地上の人間を離れ神の領域に近づく。

Götter wandelten einst bei Menschen, die herrlichen Musen

Und der Jüngling, Apoll, heilend, begeisternd wie du.

Und du bist mir, wie sie,...

神々はむかし人間にまじって歩んでいた、栄光あるミューズ達も、
 青年アポロも、人間達の心を癒やし靈感を与えていた、今のあなたと同じ様に。 (手)
 あなたは私にはその神々と同じなのだ、

(Götter wandelten einst……, V. 1 ff.) 1799 年

: ihr schuffet euch einst ihr Einsamen liebend
 Nur von Göttern gekannt eure geheimere Welt.
 Ihr Verwaisten, so lebet ihr fromm in genügsamer *Stille*…
 あなた達は神々のほかには何びとも知られず
 あなた達のひそやかな世界を創った、あなた達、孤立の人達よ、
 あなた達は、心地よいしじまの中で、敬虔に暮している。

(Götter wandelten einst……, Lesarten 2, 596, Z. 22) 1799 年

彼等はやがて、神々の域に達するのである。

Denn die Sterbliches nur besorgt, hinab in den Orkus
 Sank die Menge, doch sie fanden zu Göttern die Bahn.
 地上の事だけを気づかう多くの者はやがて地下の国に引きとられたが、
 かれら二人は神々の道を見出した。

(Götter wandelten einst…, Lesarten) (手)

ディオティーマは seelig Wesen! (I. 1. 216, V. 17) であり、Götterbild (I. 1. 217, V. 44)
 das schöne Engelsbild (I. 1. 218, V. 71) であり、彼女を前にすると、詩人の心には、なごやかな春
 と、平和の至福の境地が訪れる。

Sonnengluth und Frühlingsmilde,
 Streit und Frieden wechselt hier
 Vor dem schönen Engelsbilde
 In des Busens Tiefe mir.
 炎熱の夏となごやかな春
 闘争と平和はいま
 この美しい天使を前にして
 わたしの胸の深みで入れかわったのだ。

(Diotima, V. 69 ff.) 1796 年 (手)

彼女の中で、詩人は神々の生の中に導き入れられる。

Habe, wenn in reicher *Stille*,……
 Seine Ruhe, seine Fülle
 Mir ihr Genius vertraut,
 Dann……ins volle Götterleben
 Tritt die sterbliche Natur.
 そのひとの心が、ゆたかな沈黙が
 その平安と充溢を
 わたしにうちあけてくれるとき……

その時……みちあふれる神々の生の中へ
無常のわたしは踏みのぼった。

(Diotima V. 81 ff.) 1796年(手)

このような幸福な瞬間には、ゆたかな *Stille* があるのみで、言葉は最早、無用のものである。*Stille* は、充溢であり、言葉以上のものを語るものである。神々の域にも達した彼等の浄福の境地こそが *die Stille* なのである。

「僕達の静かなる幸福も言葉にならなくてはならぬとすれば、それは幸福にとって、矢張り死を意味する。」(1797年 *An Neuffer*)^{註16)} 同じ頃の作品のヒューペリオンの中では、「言語というものは無用の長物で、最上なるものは、海底の真珠のように、常に独りで存在し、奥底に休まっているのだ。」^{註17)} と述べられ、沈黙の至福の貴さが称えられている。かくして、*still* は胸にあふれ、口では表現出来ぬ感情を表現する言葉となっている。

「訣れに際して、僕の静かな、言葉に出しては言えぬ喜びを受けておくれ。」(*An den Bruder*, 1801年)^{註18)} 「それからなお長い間、開いている窓の側に一緒に坐っていた。高尚な、精神的な静寂が私達を包んだ。」(*Hyperion*)^{註19)}

このような、言葉のない、しかも豊かな内容とあふれる表現の世界は、子供時代の静かな日々であり、金色の日々であった。少年は人間の住む世界の喧騒から、神によって救われ、森の静寂の中で、神や花や風との無言の会話の中で育つ。然しそれは人間との会話以上に通じ合うものであり、理解し合うものであり、教えられる事の豊かなものであった。

Da ich ein Knabe war,
Rettet' ein Gott mich oft
Vom Geschrei und der Ruthe der Menschen,
Da spielt' ich sicher und gut
Mit den Blumen des Hains,
Und die Lüftchen des Himmels
Spielten mit mir.
.....
Zwar damals rieff ich noch nicht
Euch mit Nahmen, auch ihr
Nanntet mich nie, wie die Menschen sich nennen
Als kennten sie sich.

Doch kannt' ich euch besser,
Als ich je die Menschen gekannt,
Ich verstand die *Stille* des Aethers
Der Menschen Worte verstand ich nie.
.....
Im Arme der Götter wuchs ich groß.

(Da ich ein Knabe war……)

神との対話は、単なる意思伝達的手段に過ぎぬ味気ない言葉や、意味のない叫び、騒音にすぎぬ人間の言葉ではなしえない。彼も神々も、人間同志が行う呼び方では、呼ばわらない。*die Stille des Aethers*こそが神の言葉であり、会話の場であり、彼の心の伝わる所である。

彼は森の花と遊び、空から吹く微風とたわむむれはしたが、決して森の静寂、エーテルのしじまを破

る少年ではない。花の様に静かに、風と戯れる花の言葉、風の囁きを解する静かな少年であり、その生活は *frei* な生活であるが同時に *still* であるのだ。

Ach! wir lebten so frei im innig unendlichen Leben,
Unbekümmert und *still*,.....

ああ私達は、親密で限らない生活の中で自由に生きていた
心とられる事なく静かに……

(An einem Baum, V. 11f.) 1797 年

少年の心の中には、安息と静かな愛が住っていたのである。

Die Flammen und die Stürme shonten
Mein jugendlich Elysium,
Und Ruh' und *stille* Liebe thronten
In meines Herzens Heiligtum.

焰と嵐は私の幼い楽園を
おかさなかった。
そして安らぎとしずかな愛が
私の心の聖殿を統べたのだ。

(Das Schicksaal, V. 69 ff.) 1793 年 (手)

少年は人間の世界から、エーテルの気の溢る自然の樹、花の中に逃れ、樹木が太陽の光を受けて成育する様に、エーテルの中で、花の様に、清らかに、貴く育つ。いわば少年は自然の懷の中で、花そのものになっていたのだ。

生長し、大人の域に達しても、尚心は少年のままでいられる人、それは詩人である。ヘルダーリンは自己を花になぞらえる。

Da ich……/Noch an dir, wie eine Blüthe hieng,
一つの花の様に、われおんみから離れず

(An die Natur, V. 2) 1795 年

Wie heraus in Luft und Licht
Meiner Blumen seelig Streben
Aus der dürrn Hülse bricht.

さながら大気と光をあびて
わたしの花たちの清らかな力が
古いからを破って溢れ出るように。

(Diotima V. 6 ff.) Mittlere Fassung 1796 年 (手)

大地に根を張り、空の光と雨にその成長を頼る花は、両者の恵みの結実であり、互に求めあっている分かれた存在の結実、合一である。花は生の力の極致であり、その無目的の自己充実の中に、神の意志の実現が見られる。厳しい外界によって、傷つきながらも、束の間のものであろうとも、花は、美の秘密、静けさの中での充実を、神に充たされた生活をこの世に現す。花の最高の時、開花は瞬時のものであり、はかないものである。花と共に育ち、言わば花そのものになったと言える少年の静かなる日々、黄金の日々は、短く、詩人は、さすらいの中で、過去の神の世界をかえりみるのみである。詩人そ

のものである花、植物は、根を抜かれ、今や大地をさすらい、かつての幸福を嘆く。

Einst war ichs (Glückliche), doch wie Rosen, vergänglich war
Das fromme Leben, ach!

かつては私も幸福だったが、しかし、ああバラの花のように
浄福の命は短かった。

(Mein Eigentum, V. 17f.) 1799 年 (片)

花が蕾を開き、その美しい姿を見せる事、blühen は、大地と天との合一、人間と神との一体、Vollendung を意味する。花をつける正しい時が来た事は、完全になる時が来ているのである。

Am Abendhimmel blühet ein Frühling auf;
Unzählig blühen die Rosen und ruhig scheint
Die goldne Welt;

夕べの空に春は咲き
数しれずバラははなやぎ、 金色の世界は
満ちたりて輝く。

(Abendphantasie, V. 13 ff.) 1799 年 (手)

„Der Wanderer“ の中では大地と天との結合が予感され、バラの輝きが想われている。

Aber vielleicht erwärmst du (Mutter Erde) dereinst am Strale des Himmls,
Aus dem dürftigen Schlaf schmeichelt sein Othem dich auf;
……Rosen glühen und Wein sprudelt im kärglichen Nord.

(Der Wanderer, V. 31 ff.) 1800 年

又 Ode „Der Abschied“ では、詩人とディオティーマは、in langer Zeit に die Seeligen になり、彼等の静かな会話の間、百合が花をつけ香りを漂わすのである。花の開花が、魂の合一の象徴となり、彼等が神の心に近づき、Vollendung の状態にある事を示している。

Stauend seh' ich dich an, Stimmen und süßen Sang,
Wie aus voriger Zeit, hör' ich und Saitenspiel,
Und die Lilie duftet
Golden über dem Bach uns auf.

驚いて私は君を視、君の声、楽しい歌琴の調べを昔ながらに聞く。
そして百合は私達のために金色に小川の岸に咲き香っているのだろう。

(Der Abschied, V. 3 ff.) 1800 年

創造の神が、神に対して静かなる心を持っている人の心を開く時、それは、人の心の中に優雅の花が咲く時である。

Wenn er die Zeiten erneut, der Schöpferische, die stillen
Herzen der alternden Menschen erfrischt und ergreift,
……und jetzt wieder ein Leben beginnt,
Anmuth blühet wie einst, und gegenwärtiger Geist kömmt,
更に彼、この創造の神が時を新たにし、
老い古びゆく人の心を若々しく力づける時、

ここに再び一つの生命は始まって、
 古き代のように優雅は芽ぶき、精神は現存する。

(Heimkunft, V. 31 ff.) 1801 年 (手)

神の意思の実現とも言える花の咲く時、その時は、大気も、人の心も still である。併しその静けさは永続するのではなく、瞬時のものである。詩人はこの開花の時、至福の時、Vollendung の時を、即ち still なものを瞬時のものでなく、永続的なものにしようと努める。

「ヒューベリオンの運命の歌」の中では、神々の精神は永久に花咲き、眼は、一時的な静かな明るさではなく、静かで、変らぬ明るさだと詠われている。

Keusch bewahrt
 In bescheidener Knospe,
 Blühet ewig
 Ihnen der Geist,
 Und die seeligen Augen
 Bliken in stiller
 Ewiger Klarheit.

つつましい蕾のうちに
 汚れなくまもられて
 その神々の精神は
 永久に花咲いている
 そしてそのやすらかな眼は
 静かな変らぬ
 明るさをたたえている。

(Hyperions Schicksaalslied, V. 9. ff.) 1799 年 (手)

従来、形容詞の still は、形容する対象が、その本質上、still という性質を永続的に持つものに附せられていた。例えば、Hölderlin が、自己の目標としていた、又彼以上に敬虔主義的感情に溢れる Klopstock の用法や、Klopstock 模倣時代と言える彼の初期の作品の用法が、それである。

Klopstock の場合

Willsommen, o silberner Mond,
 Schöner, stillen Gefährt der Nacht!

(Die frühen Gräber, V. 1f.)

als in dem stillen
 Tempel ich sahe der Wohlfahrt Mutter,

(Kaiser Alexander, V. 13 f.)

初期の Hölderlin の場合

Du stiller Mond. (1.3 V. 3)
 Bald umgiebst dich, unvollkommne Hülle,
 Dunkle Nacht, des Grabes Stille. (1. 14. V. 48)
 am schrecklich stillen Sterbebette (1. 16. V. 29)

die *stille* Schatten (1.31. V. 8), in der *stillen* Halle. (1.68. V. 36) u.s.w.

併し中期の Hölderlin では

im *stillsten* Thale (1.190. V. 49), die *stillen* Teiche (1.187. V. 15),
im *stillen* Tannenhaine (1.188. V. 33), in *stillen* Laube (1. 307. V. 7)
den *stillen* Strom (1.251. V. 1), des Ozeans *stillen* Wiege (1. 578. Z. 31)

の例にみられる様に、一般に、その特質として静寂を持ち合わせぬ対象に、*still* を附加して永続的な静寂をもたらしている。谷や杜や、流れは、月や墓とは違って、それ自体が静かなものではなく、さざめきや、木のさやぎや水音の絶えない所であるが、*still* が附せられて常に静かなものになって来る。*still* が附せられる事によって、樹の間に、谷間に、自然と人間の触れ合いの場が設けられ、そのしじまは永続的なものにされ、その永続的静寂の中で花が *blühen* し得るのである。

静寂の中で、草花が、母なる大地と、父なるエーテルとの共同の作業の後、花をつける時、即ち詩人が自然に対して心を開く時、その時は、日光の強く照りつける真昼時ではなく、又、草木も眠る真夜中でもない。神の現れとも言えるエーテルのしじまの現われる時、それは黄昏時である。

……es atmen

Der dunkeln Erde Blüten mich liebend an,
Und lächelnd über Silberwolken
Neigte sich segnend herab der Äther.

(Geh unter, schöne Sonne, V. 13 ff.) 1800 年

小暗い大地の花にはふくよかな愛の息吹きを伝えきて、
白銀の雲居の彼方からは祝福するように微笑みながら
エーテルがゆるやかに僕の頭上へなびいてくるのだった。

(谷)

そしてそのしじまの中で、花は美しく咲くのである。

und die Blumen in der *Stille*,
Wohl blühten schöner auch sie und helle quillten lebendige Brunnen.

(Versöhnender du nimmergeglauht…… V. 16 f.) 1801 年

しじまの中の花は又一段と美しく花をつけ絶え間ない泉は、清らかに湧き出ている。

詩人は夕暮の中に、天と地の融和を見、自然の神の顕現を見ている。それは人間が自然の神性に触れうる時である。黄昏時の神的な瞬間に、人間と神とは結ばれ、生きとし生くる者は和解し、やがてその和解の祝いをする時となる。

Auch ruht und zu der Schülerin jezt,
Der Bildner, Gutes mehr
Denn Böses findend,
Zur heutigen Erde der Tag sich neiget. —
Dann feiern das Brautfest Menschen und Götter,
Es feiern die Lebenden all,

(Der Rhein, V. 176 ff.) 1801 年

そして建設した光明は、今や
拙く来たものによりも、傑作に注目しながら
今日というこの日の地球に身を傾ける
女弟子の上に身をかがめるように
それから人間達と神々とが婚礼の祝いをする。
生きとし生けるすべてのものらが祝いに加わる。 (片)

, aber die Unversöhnten
Sind umgewandelt und eilen
Die Hände sich ehe zu reichen,
Bevor das freundliche Licht
Hinuntergeht und die Nacht kommt.

(Der Rhein, V. 190 ff.)

併しこれまで不和だった人々は和解の手を取り合う。
今では変った。そして急いで
親愛な太陽が沈んで
夜になってしまわぬうちに。

(片)

Gastfreundlich tönt dem Wanderer im
Friedlichen Dorfe die Abendglocke.
.....in stiller Laube
Glänzt das gesellige Mahl den Freunden.

(Abendphantasie, V. 3 ff.) 1799 年

もてなし迎えるように漂泊者に
静かな村の晩鐘は鳴り響く
.....もの静かな園亭には
饗宴の輝きが友達を照らしている。

(手)

Drum hab ich heute das Fest, und abendlich in der Stille
Blüht rings der Geist.....

(Versöhnender, V. 33 f.) 1801 年

そのため、私は今日祝いを挙げる。そして夕暮の静寂の中で
精神はあたりに花を咲かす

黄昏の時は夜と昼の平衡の時である。昼の呵責のない暑さと、夜の冷気が薄暮の時釣合う。又、その時人間と自然の闘争の時と、万物すべて生氣を失い、おぼろに覆み眠る時が釣合うのである。天と地がその境を失い混然と一体となる時、万物が一に融け合う黄昏の静寂の時に、人々は和解し、祝いを持つのである。静寂は詩人と言う花の如き清らかな選ばれた人と、神や自然との魂の交流の場に又、神と人との一体化の場に止まらず、すべての人々の和解の場になっている。

この祝祭の行われる季節は何時であろうか。それは、4つの季節の中、昼と夜が平衡する季節、しかも、すべての花が結実し、ブドウの実の熟す、稔りの季節、秋であろう。詩人は秋に対して特別の感情を抱いている。

「美しい秋の日々は私を大変楽しませてくれる。清らかで、新鮮な空気と、この季節に独特の美しい光、幾分黒ずんだ緑に覆われた大地……これらすべては、自然のもつ他のどの季節にもまして私の心に親しいものだ。この季節には静かな優しい精神がある。」(An den Bruder, 1794年9月)^(註20) 又、Hyperion の中では、「この季節にはある大いなる、もの静かな優しい霊が籠っていた。」^(註21) とある。又 „An die Hofnung“ の中では、詩人は希望を秋の日の静寂の中にある花の中に求めるのである。

,dort wo……die liebliche
Zeitlose mir am Herbsttag aufblüht,
Dort, in der Stille, du Holde, will ich
Dich suchen,……

(An die Hofnung, V. 9 ff.)

かくして、平和の祭は、果実の熟する秋の夕暮に行われるのである。die Stille は、人間の希望の存する所、人と神との出会いがなされ、自然と人が一つにとけ合い、人間が互に和解し合う聖域となっている。

「高尚な精神的な静寂が私達を包んだ。大地と海とは、私達の頭上にかかっていた星のように、恍惚として黙っていた。……私達の魂は今では一層強く歩み寄らずにはいなかった。」(Hyperion)^(註22)

人間と自然、人間同志の和解がなされる聖域 die Stille は最早人間の意志と行為によって得られるものではなくなっている。人間が心静かに、神を迎え入れる用意、準備をなした所に、神の意思の実現の場 die Stille が訪れる。それは神から与えられるものであって、人がつくり出すものではない。神自身もその様な心静かな人の前に現われて来る。

In milder Luft begegnet den Sterblichen,
Und wenn sie still im Haine wandeln,
Heiternd ein Gott;

(Der Zeitgeist, V. 14 ff.) 1799 年

人々が静かに杜のなかをさまよえば、
どこからか軟らかな風によって晴れやかに
彼等を神が迎えるでしょう。

(谷)

人が謙虚に自然に心を開く時、心の通う親しい自然の die Stille の中で神と人とのめぐり合いが起り和解が生じる。それは又人がすべての巨人的なものを離れ、運命に自己をゆだねる時である。

Und wenn im heißen Busen dem Jünglinge
Die eigenmächt'gen Wünsche besänftiget
Und stille vor dem Schicksaal sind,

(Rückkehr in die Heimath, V. 17 ff.) 1800 年

かくして、若人の血気にはやる胸裡に宿る、数々の
驕慢な願いもいつしか和められて、ついに
静かに運命と対するようになれば……

(谷)

天と地、天と人との和解がなされる浄福の境地 *die Stille* は、人が、神を信じ、謙虚に己れを開く時、神からこの世に授けられる。人はひたすら運命に自己をゆだね、信じつつ、希望しつつ、忍びつつ、静かにその時を待つのである。

Und du kennest ihn auch, du theure Mutter! und wandelst
Glaubend und duldend und *still* ihm, dem Erhabenen, nach.

(Meiner verehrungswürdigen Großmutter, V. 20 f.) 1799 年
 , zum Aether hinauf

Sie, die inniger Liebe treu, und göttlichem Geiste
Hoffend und duldend und *still* über das Schicksaal gesiegt.

(Götter wandelten einstV. 13 ff.) 1799 年

hoffen し dulden し *still* である事が詩人の基本的態度であり、かくしてこそ、詩人に *die Stille* が与えられる。*die Stille* は植物の様に、自ら花をつける用意を備えながらも、自己から働きかける事なく、花をつける場与えらる迄はじっと待つという忍耐によって得られる *passiv* な至福の境地なのである。「静かに、しっかりと自己の本質の上に根を下し」²³⁾ て神を待つ時、人間世界で、対立するものが和解し、完全になる時、神に対してすべてが開かれる時、心の通う自然の中で、神が現実に姿をみせる不思議な時が *die Stille* である。

die Stille, *Blühen*, *Abendstunde*, *Fest*, これらはすべて互に関連を持ち合い、共に、すべてが等しく、美しく平衡を保った状態、充実した状態を現し、神の近ずきのしるしとなっている。

最後に、*still* と同じ内容を持っていると考えられる形容詞をみてゆこう。それには *still* が異稿で、他の形容詞に書き換えられている場合を見るのが、最も適当であろう。何故ならば、詩人は言葉を変える事によって、より適切な表現へと努力したとは言え、全く異なる語感や、内容を持つ語を使用する事はありえないからである。それらは殆んど同一の表象圏にあると考えられる。

still—ernst (1. 93. V. 3) *stillen—schönen* (1. 218. V. 71)

still—todt (1. 212. V. 1)

heilig—still—dunkel (1. 629. Z. 16)

heilig—still—alt—aufhell—hell (1. 386. V. 5)

still—alt (1. 386. V. 33) *still—stumm* (2. 22. V. 5)

hold—still (2. 33. V. 18) *still—stet* (2. 44. V. 19)

still—wohlzufrieden (2. 90. V. 5)

theuern—still—heilig—stumm (2. 106. V. 98)

still—lieben—gut (2. 144. V. 87)

fromm—still (2. 434. V. 9)

still—zärtlich—hold—jung (2. 443. V. 30)

ruhig—hoch—still (2. 727. V. 28)

これらの例に見られる様に、*still* は先ず、*heilig* の領域に密に重なり合っている。*still* は *heilig* であり神の現われる場なのである。万物が神聖となり融和するところ、それは *stumm* の時であり、又貴い (*theuer*) ところである。*Still* は優しく (*zärtlich*) で穏やかな所であるが、同時にすべてを本来の姿に立ち帰らせる *ernst* なものでもある。本来の姿において、*schön* となり、*hell* となり、物すべて *still* の中で *zufrieden* を見出す。かくして *still* は *lieben*, *gut* のものであり、*hold* のものとな

るのである。先に、die Stille は、すべてが美しく釣合を保つ所、充実と完全のしるしであると述べたが、これは次の形容詞の並列でも確認出来る事である。

mäßig und still (2. 14. V. 9), schön und still (2. 64. V. 24) still は一時的なものではなく、stet なものでその場は dunkel である。併しそれは alt を経る事によって、やがて hell に変わり、neilig となり、同時に jung をとりもどす。

夕暮時、静寂の中で、天と地が合一し、昼と夜が美しい均衡と節度を保ち、やがて、朝と共に明るく、新しいものが生れる。この die Stille を求め、それに耳を傾け、魂を注ぐ者がドイツの詩人であり、就中 Hölderlin である。die Stilleこそ人間を heilig にし、神の領域に近づけ、詩人を詩人たらしめるものであり、Hölderlin が終生、探し求めたものであった。

.....dann sitzt im tiefen Schatten,

Wenn über dem Haust die Ulme säuselt,
Am kühlathmenden Bache der deutsche Dichter
Und singt, wenn er des heiligen nüchternen Wassers
Genug getrunken, fernhin lauschend in die Stille,
Den Seelengesang.

(Deutscher Gesang, V. 15 ff.)

終

Text und Literatur

- 1.) Hölderlin, Friedrich: Große Stuttgarter Ausgabe, hrsg. v. F. Beißner 1 Bd., 2 Bd., 3 Bd., 6 Bd.

(引用例、第1巻58頁第12行は1, 58. V. 12と略)

- 2.) Maurer-Stroh : Deutsche Wortgeschichte I Berlin 1959
- 3.) R. T. Stoll : Hölderlins Christenhymnen. Basel 1952
- 4.) L. Mittner : Motiv und Komposition, Versuch einer Entwicklungsgeschichte der Lyrik Hölderlins. Hölderlin Jahrbuch 1957 S. 73—159.

尚論中(手)(谷)(片)とあるのは、それぞれ手塚富雄、谷友幸、片山敏彦氏の訳を借用した。

注

- 1) „Dir ist gut, irgend einen Lärm in der Nähe zu haben; ich brauche Stille.“ (6. 127. Z. 22 f.)
- 2) „Ich habe in mir ein so tiefes dringendes Bedürfnis nach Ruhe und Stille.“ (6. 404. Z. 17 f.)
- 3) „Ich denke einfältige und stille Tage, die kommen mögen.“ (6. 438. Z. 38)
- 4) „Ich bin jetzt so allein, immer, so in der Stille—und das behagt mir—.“ (6. 12. Z. 11 f.)
- 5) „—u. es war alles so still um uns —.“ (6. 19. Z. 23)
- 6) „Hier geht es wirklich still und ruhig zu.“ (6. 60. Z. 5)
- 7) du Sanfte (1. 42. V. 5), Freundin aller Lieben (1. 42. V. 5), holde Freudegeberin (1. 42. V. 16), lehre Stille (1. 42. V. 16)
- 8) 1. 42. V. 9
- 9) Der Wortschatz des deutschen Pietismus (von A. Langen, Tübingen 1954) S. 172
- 10) „Wir können uns……im Thale der Ruhe und Stille freuen, ……“ (6. 124. Z. 21 ff.)

- 11) „Die grose Natur veredelt, und stärkt uns doch unwiderstehlich.“ (6, 127, Z. 26)
- 12) „Der Adel und die *Stille* in ihrem Wesen kontrastirt ziemlich zu den Geschöpfen hier u. anderswo.“ (6, 76, Z. 49 f.)
- 13) „Lieblichkeit und Hoheit, und Ruh und Leben, u. Geist und Gemüth und Gestalt ist Ein seeliges Eins in diesem Wesen. (6. 213, Z. 13 ff.)
- 14) „Sie ist schön wie Engel. Ein zartes geistiges himmlischreizendes Gesicht ! Ach! ich könnte ein Jahrtausend lang in seeliger Betrachtung mich und alles vergessen, bei ihr, so unerschöpflich reich ist diese anspruchlose *stille* Seele in diesem Bilde!“ (6. 236, Z. 53 ff.)
- 15) „Es ist nicht übel, wenn man in der Jugend oben hinaus will; aber das reifere Leben neigt sich wieder zum Menschlichen und *Stillen*.“ (6. 241, Z. 80 ff.)
- 16) „Es ist auch immer ein Tod für unsere *stille* Seeligkeit, wenn sie zur Sprache werden muß.“ (6. 236, Z. 48 f.)
- 17) „Die Sprache ist ein großer Überfluß. Das Beste bleibt doch immer für sich und ruht in seiner Tiefe, wie die Perle im Grunde des Meers.“ (3. 118)
- 18) „……und nimm zum Abschiede die *stille*, aber unaussprechliche Freude meines Herzens in Dein Herz—“ (6. 407, Z. 17 f.)
- 19) 注22参照
- 20) „Es ist ein *stiller*, zärtlicher Geist in dieser Jahreszeit.“ (1797年9月. 6, 251, Z. 10 f.)
- 21) „Es war ein großer, *stiller*, zärtlicher Geiste in dieser Jahreszeit,……“ (4. 126)
- 22) „Wir saßen noch lange zusammen bei offnen Fenstern. Hohe geistige *Stille* umfieng uns. Erd' und Meer war seelig verstummt, wie die Sterne, die über uns hiengen. ……Unsre Seelen mußten um so stärker sich nähren,……“ (4. 26)
- 23) „und *still* und vest auf meinem eignen Wesen zu beruhen.“ (6. 257, Z. 73)